

Title	現代日本語における極性に関わる副詞の記述的研究
Author(s)	朴, 秀娟
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/58525
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

【20】

氏 名	朴 秀 娟
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 2 9 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	現代日本語における極性に関わる副詞の記述的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 工藤真由美 (副査) 教 授 渋谷 勝己 教 授 田野村忠温

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語における否定とも肯定とも共起する副詞のうち、否定と肯定では意味・機能が異なる一群の副詞を取り上げ、タイプ化した上で、各副詞の意味・機能と使用実態を分析したものである。本文 109 頁、400 字詰め原稿用紙換算 393 枚よりなる。

第1部「序論」では、様々な観点から行われてきた先行研究を精査した上で、従来の研究において手薄であった極性の観点から、「とても」「なかなか」「ちょっと」「あまり」「それほど」「まるで」の6つの副詞の分析・記述を行うと述べる。あわせて、「とても」「あ

まりに」「あんまり」や「そんなに」のような類義形式も取り上げ、文体差に留まらない文法的な違いがあることも含めて記述するとする。

第2部「本論」は、第4章～第6章よりなり、動詞の否定形式と共起し実現の不可能性に関わる副詞（タイプⅠ）、動詞、形容詞の否定形式と共起し程度・量に関わる副詞（タイプⅡ）、タイプⅠともタイプⅡとも異なる副詞（タイプⅢ）の3グループに分けて、個々の副詞の精密な記述を行うとともに、それらの副詞に共通する意味・機能を分析している。

第4章では、タイプⅠの3つの副詞を取り上げ、実現の不可能性を表すという共通性のもとで、「とても」は原因・理由があって実現不可能であることを明示するのに対し、「なかなか」は実現が困難であることを表すという違いがあり、否定形式と共起した「ちょっと」は「とても」に近い用法になると述べている。一方、肯定形式と共起する場合は、これらの形式はすべて程度副詞として働くが、それぞれ程度差があると指摘している。

第5章では、タイプⅡの2つの副詞「あまり」「それほど」を中心的に取り上げ、タイプⅠの副詞とは違って、動詞の否定形式のみならず形容詞の否定形式とも共起して部分否定を表すという共通性を有するとした上で、肯定形式と共起した場合には、「あまり」が従属文に限定されて度合いが超えることを表すのに対して、「それほど」は本来の文脈指示用法であるという違いがあると述べる。あわせて、「あまり」に対する「あんまり」、「それほど」に対する「そんなに」には、文体差に留まらない文法的違いがあると指摘している。

第6章では、タイプⅠ、Ⅱにおさまりきらない副詞「まるで」を取り上げ、動詞の否定形式に限定されて完全否定を表す一方、肯定形式と共起した場合には比況を表すとした上で、「違う」「欠けている」のような形式と共起した場合には、肯定形式ではあっても比況の副詞としては機能しないと指摘している。

第3部では、総合的なまとめを行うとともに、今後の課題として、記述の網羅性、意味分析の方法論、史的観点からの考察が残されていると述べる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、「あの人はちょっと招待できなかった」とは言えても「ちょっと招待できた」とは言いにくく、逆に「ちょっとがっかりした」とは言えても「ちょっとがっかりしなかった」とは言えないような、否定と共起するか肯定と共起するかで意味・機能が異なる副詞について、共時的観点から精密な分析を行った労作である。個々の副詞の分析においては、①否定とも肯定とも共起しうる副詞において「難しい、無理だ、欠けている」のような困難、不可能、欠如を表す一群の語彙的形式が媒介的役割を果たしているのではないかと指摘、②「とても」が動詞の否定形式と共起する場合には実現が不可能であることに対する「条件づけ」があるという指摘、③「ちょっと」が否定形式と共起するようになった場合には構文的位置が自由になるという指摘、④書き言葉では「あまり」と「あまりに（も）」の意味・機能上の分化があるのに対して、話し言葉では「あんまり」が両形式の意味・機能を担うという指摘、⑤「まるで繊細じゃない」とは言いにくい「まるで繊細さがない」は可能になるという指摘等、実例を丹念に分析した手堅い成果が多々見られる。

ただし、個別的事実の指摘に留まり、なぜそうなるのかの説明が不足していると思われる。どのような言語においても副詞の体系的記述は難しいものがあるが、肯定か否定かという極性の観点から分析していくことが副詞論においてどのような意義を有しているかという理論的問題を今後深めていくことが必要であろう。また、「とても」に対する「とっても」の分析や「まるで」が共起しうる動詞の否定形式の変化等において部分的には試みているが、史的観点からの全面的な考察も必要不可欠である。このことによって、単なる事実の指摘から、文体差も含めて、否定とも肯定とも共起しうる副詞の有り様をダイナミックに理論的に捉えることが可能になるとと思われる。

本論文は、このような未完成な部分を多く残してはいるが、部分的な用例に基づく安易な解釈に甘んじることなく、綿密な考察によって興味深い事実を発掘・分析し、今後開拓していくべき方向性を提起した点で積極的評価が与えられるものとなっている。著者の母語である韓国語との比較対照が行えるようになる可能性を有した論文となっていることから、今後は共時的ならびに通時的観点による韓国語との比較対照にも期待したい。

よって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであると認定する。